

(8) 博多漁港の建設

玄界灘などの海の幸を前にして地理的にも、また他に卓越する良港湾たる博多港に近代設備の漁港を建設することは、福岡市民が強く念願するところであり、明治、大正期を通じた本市の懸念でした。しかしながら、本市は商港としての博多港自体の改築、拡張問題に追われ、本格的な漁港建設計画には至っていませんでした。

漁港建設への動きは年とともに高まり、昭和2年には、県下の水産業団体などからの要望により、漁港建設問題についての県、市関係者の会合が開かれ、また、博多部の漁業関係者や魚市場、製氷会社などで「博多漁港速成同盟会」が組織されました。さらに、翌3年には年頭から博多港修築計画の中に漁港施設の完備も盛り込むべきとの意見が、漁業関係者などから盛んに唱えられ、このような動きを代表する形で、福岡市会において、昭和4年6月15日に「漁業施設促進に関する建議」が提出、満場一致で可決されました。

しかしながら、市当局は昭和4年から実働を開始した博多港修築第一期工事の円滑な遂行に専念せざるを得なかったため、漁港計画は、その後しばらく表面的にはこれという進展を見せずに経過しました。

博多漁港の建設問題が急浮上したのは、昭和9年になって福岡市が徳島県九州出漁団の誘致に本腰になってからでした。

当時、この漁業団は、長崎県五島列島の玉之浦町（現五島市）を根拠地として朝鮮海峡、東シナ海の海域などに出漁していましたが、つねづね漁獲物の販路拡張、出漁の地理的關係などから、さらに有利な地を求めて各地の調査を行っていました。

以前から漁業団を誘致すべきとの市民の声があったことから、福岡市会としても誘致による大きな経済効果や漁業団の意向も勘案したうえ、昭和9年3月2日に「福岡漁港設置及び徳島県九州出漁団誘致に関する建議議案」を提出、満場一致で可決するなど、福岡市一丸となって、長崎県、伊万里町、佐世保市、さらには下関市などの候補地と激しい誘致合戦を展開した結果、徳島県遠洋漁業組合総会において、本市への漁業団の移転が決定されました。同年9月からは次々と漁業団の移転が開始され、これを受けて、昭和9年12月から昭和12年3月にかけて、福岡船溜は漁港として整備されていき、以後の博多漁港としての発展につながっていくのです。

<福岡市議会史第3巻「昭和編（一）」第十章 博多港の修築と拡張 から>